

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

The optative mood suffixes of the old Japanese language

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 嘉一郎, Fukuda, Yoshiichiro メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/810

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



中古日本語の希求の叙法

福 田 嘉一郎

はじめに

筆者は、述語が表す命題事態の事実性を話者がどのようにとらえるかによって、述語が体系的に異なる形態をとるとき、文法範疇^{カテゴリー}をなすそれらの形態の対立を指して、叙法と呼ぶ立場をとる。叙法をこのように規定すると、中古日本語の叙法は、従来、「(用言の)活用」「(テンス、モダリティ)助動詞」「終助詞」「接続助詞」など、さまざまな品詞あるいは文法現象に分割されて説明されてきたことになる。

筆者は中古語の叙法を体系的に記述することを目指しているが、本稿は、命題事態が事実¹である／となる²ように話者が求める希求の叙法について、記述を試みるものである。

1. 叙法形式と命題形式

1.1 中古語の叙法形式

日本語の叙法を表す形式は、節の末尾に義務的に現れるものであって、話者の聞き手に対する態度を表す形式¹、節に修飾される名詞、節を後続の節

1 問投助詞、終助詞「な」「かし」、係助詞「や」の文末用法、等。学校文法では、終助詞の「な」は「詠嘆」を表し、「かし」は「念を押す」などと説明されている。それらは問投助詞とされることもある。

2 名詞節（準体句）をつくる場合、叙法形式自体が名詞の機能を併せもっている。なお、格助詞に由来する接続助詞「に」「を」を後接させる場合も、名詞節をつくる用法と見なす。

につなぐ形式³のみを、後接させうるものでなければならない。その他の形式を後接させうるものは命題形式といえる。

また、日本語の叙法形式のなかには、文末に立ちうるものと、文末に立ちえないものがあり、後者の形式は節を後続の節につなぐ接続の機能を併せもっている。そこで、前者を非接続叙法形式、後者を接続叙法形式と呼ぶことにする。

中古語の叙法形式（接尾語）の体系は、表1のようにまとめることができる。

表1 中古日本語の叙法接尾語（下線を施した形式が本稿で取り上げるもの）

命題事態の事実性のとらえ方			非接続／接続	非接続叙法形式	接続叙法形式	
命題事態が事実である／となる ↓蓋然性を判断する	蓋然性 = 1	述語の時を時間軸上に定位しない〔確言〕		「 <u>u</u> 」		
		述語の時を過去に定位する〔回顧〕	命題事態を実際に観察した時 = 述語の時	「 <u>き</u> 」		
			述語の時より後で命題事態についての情報を取得した	「 <u>けり</u> 」		
	0 < 蓋然性 < 1 〔概言〕	否定を兼ねない	述語の時が発話時以後	「 <u>む</u> 」	「未然ば」	「と（も）」
			述語の時が発話時と同時	「 <u>らむ</u> 」		
			述語の時が発話時以前	「 <u>けむ</u> 」		
		否定を兼ねる		「 <u>じ</u> 」		
	蓋然性 = 0〔仮想〕			「 <u>まし</u> 」	「 <u>せば</u> 」	
命題事態が事実である／となる ↓ように求める〔希求〕	聞き手の動き・状態を希求する	否定を兼ねない	「 <u>e</u> 」			
			「 <u>そ</u> 」			
	話者自身の動き・状態を希求する	否定を兼ねる	「 <u>禁止な</u> 」			
			「 <u>（て・に）しか</u> 」			
			「 <u>ばや</u> 」			
	第三者の動き・状態を希求する			「 <u>なむ</u> 」		
命題事態の事実性のとらえ方を後続節の述語に委ねる〔中止〕	否定を兼ねない			「 <u>i</u> 」		
				「 <u>て</u> 」		
	否定を兼ねる			「 <u>つつ</u> 」		
				「 <u>ながら</u> 」		
				「 <u>で</u> 」		

3 接続助詞「ば」「と（も）」。いずれも学校文法では「已然形」に後接するとされる。

1.2 中古語の命題形式

中古語の主な命題形式を、その形態と、述語の核になりうる（述語の先頭に立ちうる）か否かに基づいて分類すると、表2のようになる。

表2 中古日本語の命題形式

形態 \ 述語の核	核になりうる	核になりえない（接尾語）
「四段」型	(例)「咲く」:/sak-/	「たまふ」:/-itamaF-/ ~ /-tamaF-/
「ラ変」型	(例)「あり」:/ar-/	「結果たり」:/-itar-/ ~ /-tar-/ 「り」:/-er-/ ~ /-r-/ 「はべり」:/-iFaber-/ ~ /-Faber-/ 「めり」:/-umer-/ ~ /-rumer-/ ~ /-mer-/ ~ /-kaNmer-/ 「終止なり」:/-unar-/ ~ /-runar-/ ~ /-nar-/ ~ /-kaNnar-/
「一段」型	(例)「着る」:/ki-/ (例)「蹴る」:/ke-/	
「二段」型	(例)「過ぐ」:/sugi-/ ~ /sugu-/ (例)「受く」:/uke-/ ~ /uku-/	「さす」:/-ase-/ ~ /-asu-/ ~ /-sase-/ ~ /-sas-/ 「しむ」:/-asime-/ ~ /-asimu-/ ~ /-sasime-/ ~ /-sasimu-/ ~ /-karasime-/ ~ /-karasimu-/ 「らる」:/-are-/ ~ /-aru-/ ~ /-rare-/ ~ /-raru-/ 「つ」:/-ite-/ ~ /-itu-/ ~ /-te-/ ~ /-tu-/ ~ /-karitu-/
「ナ変」型	(例)「死ぬ」:/sin-/ ~ /sinu-/	「ぬ」:/-in-/ ~ /-inu-/ ~ /-n-/ ~ /-nu-/ ~ /-karin-/ ~ /-karinu-/
「カ変」型	(例)「来 ^く 」:/ko-/ ~ /ki-/ ~ /ku-/	
「サ変」型	(例)「為 ^す 」:/se-/ ~ /si-/ ~ /su-/	「むず」:/-amuzu-/ ~ /-muzu-/ ~ /-karamuzu-/
「ク活」型	(例)「高し」:/taka-/	「べし」:/-ube-/ ~ /-rube-/ ~ /-be-/ ~ /-karube-/
「シク活」型	(例)「悲し」:/kanasi-/	「まほし」:/-amaFosi-/ ~ /-maFosi-/ ~ /-karamaFosi-/ 「まじ」:/-umazi-/ ~ /-rumazi-/ ~ /-mazi-/ ~ /-karumazi-/
「ナリ・タリ」型		「連体なり」:/-nar-/ ~ /-ni-/ 「指定たり」:/-tar-/ ~ /-to-/
特殊型		「ず」:/-az-/ ~ /-an-/ ~ /-azar-/ ~ /-z-/ ~ /-n-/ ~ /-zar-/ ~ /-karaz-/ ~ /-karan-/ ~ /-karazar-/

「二段」型, 「ナ変」型, 「カ変」型, 「サ変」型, 「ナリ・タリ」型, 特殊型の命題形式は, 後接する語によって選ばれる異形態を持っている⁴。また, 「連体なり」「指定たり」を除く, 述語の核になりえない命題形式は, 前接する語によって選ばれる異形態を持っている。「さす」「しむ」「らる」「つ」「ぬ」「ず」は, 前接語と後接語の条件をともに満たすように選ばれる異形態を持っていることになる。変化相を表すアスペクトの接尾語「ぬ」を例にとると, その異形態は表3のように分布する。

表3 変化相接尾語「ぬ」の異形態

後接語条件 前接語条件	右欄以外の語の母音 で始まる異形態	「めり」「終止なり」「べし」「u」 「らむ」「と(も)」の, 「ナ変」 型前接語に応じた異形態
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナリ・タリ」型 (-r-), 特殊型 (-r-)	/-in-/ (例)「咲きにき」 sak- <i>in</i> -iki	/-inu-/ (例)「咲きぬ」 sak- <i>inu</i> - φ
「一段」型, 「二段」型 (-i-, -e-), 「カ変」型 (-i-), 「サ変」型 (-i-)	/-n-/ (例)「過ぎね」 sugi- <i>n</i> -e	/-nu-/ (例)「過ぎぬらむ」 sugi- <i>nu</i> -ramu
「ク活」型, 「シク活」型	/-karin-/ (例)「高かりなむ」 taka- <i>karin</i> -amu	/-karinu-/ (例)「高かりぬべし」 taka- <i>karinu</i> -be-si

2. 希求の叙法形式

話者が, 命題事態が事実 {である／となる} ように求める中古語の叙法を「希求」とする。希求は, 非接続叙法形式である接尾語「e」「そ」「禁止な」「(て・に)しか」「ばや」「なむ」によって表される。「e」「そ」「禁止な」は聞き手の動き・状態への希求を, 「(て・に)しか」「ばや」は話者自身の動き・状態への希求を, 「なむ」は第三者の動き・状態への希求をそれぞれ表す。

4 いわゆる「二段活用的一段化」は, 「二段」型命題形式の u で終わる異形態が失われる現象である。なお, 「むず」は「サ変」型に分類したが, 後接語によって選ばれる異形態は持っていない。

2.1 聞き手の動き・状態への希求

希求接尾語 {「e」: /-e/ ~ /-jo/ ~ /-φ/ ~ /-kare/ }⁵ の異形態は、表4のように分布する。

表4 希求（命令）接尾語「e」の異形態

前 接 語 条 件	
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ変」型 (-n-), 「ナリ・タリ」型 (-r-), 特殊型 (-r-)	/-e/
「一段」型, 「二段」型 (-i-, -e-), 「サ変」型 (-e-)	/-jo/
「カ変」型 (-o-)	/-φ/ ~ /-jo/
「ク活」型, 「シク活」型	/-kare/

- (1) 散りぬとも香をだにのこせ (nokos-**e**) [散ってしまうとしてもせめて
香りだけでも残せ] (古今・48)
- (2) これに置きてまゐらせよ (mawirase-**jo**) [この上に置いて差し上げ
なさい] (源氏・夕顔)
- (3) 隨身一人二人仰せおきたれ (oFoseok-itar-**e**) [隨身1人か2人に供を
命じておけ] (源氏・若紫)
- (4) 川に流してよ (nagas-ite-**jo**) [川に流してください] (源氏・手習)
- (5) さらば寝たまひね (ne-tamaF-in-**e**) かし [ではどうぞおやすみなさ
いませ] (源氏・紅葉賀)
- (6) 悪しき譬を欲はざれ (negaF-azar-**e**) [悪いたとえを考えてはいけな
い] (霊異記・41)
- (7) 御気色見て参で来 (maudeko-φ) [ご意向を聞いて参れ]
(源氏・東屋)
- (8) 悪しかるべくは、よかれ (jo-**kare**) と思ふとも惑ひなむ [運が悪け

5 金水他2011:82は「命令形はほとんど裸の動詞のみであり、まれに「～させよ」等ヴォイスの接辞を含むことがある程度である」としているが、実際は(3)-(6)に見るように、アスペクトの接尾語「結果たり」「つ」「ぬ」、および否定の接尾語「ず」も、希求接尾語「e」を後接させうる。

れば、うまくいけと思っても苦勞するだろう〕（うつほ・蔵開下）

希求接尾語 {「そ」: /-iso/ ～ /-so/} の異形態は、表5のように分布する。

表5 希求（命令）接尾語「そ」の異形態

前 接 語 条 件	
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ変」型 (-n-)	/-iso/
「一段」型, 「二段」型 (-i-, -e-), 「カ変」型 (-o-), 「サ変」型 (-e-)	/-so/

(9) 我には、さらにな隠しそ (**kakus-iso**) [私には決して隠しだてしないであれ]
（源氏・蜻蛉）

(10) 物思ふ^{われ}我に声な聞かせそ (**kik-ase-so**) [物思う私に声を聞かせてくれるな]
（古今・145）

「そ」は通常、否定の意味をもつ副詞「な」と呼応して用いられ、⁶『な』+命題形式+『そ』全体で、禁止（聞き手の未来の動き・状態が事実とならないように希求する）または制止（聞き手の現在の状態が未来において事実でなくなるように希求する）を表す。

希求接尾語 {「禁止な」: /-una/ ～ /-runa/ ～ /-na/} の異形態は、表6のように分布する。

表6 希求（禁止）接尾語「な」の異形態

前 接 語 条 件	
「四段」型	/-una/
「一段」型	/-runa/
「二段」型 (-u-), 「カ変」型 (-u-), 「サ変」型 (-u-)	/-na/

6 副詞「な」と呼応することなく、単独で禁止・制止を表す接尾語「そ」の例が、院政期頃から現れる。

・さらにその御ことうしろめたく思しめしそ (**obosimes-iso**) [それについては決してご心配なさいませんように]
（とりかへばや・1）

- (11) わが名もらすな (*moras-una*) [私の名を世間に漏らすな]
(源氏・玉鬘)
- (12) われらに降れる花をさへかしらの雪と見るな (*mi-runā*) 宮人 [若
い私たちに降りかかった花まで白髪と見まちがえないでくれ、宮人たち
よ]
(うつほ・国譲下)
- (13) すきずきしき心使はるな (*tukaF-arū-na*) [浮気心を起こされてはい
けません]
(源氏・梅枝)
- 「な」は希求の意味に加えて、否定の意味を兼ねており、禁止を表す。

2.2 話者自身の動き・状態への希求

希求接尾語 {「(て・に) しか」: /-i (te; ni) sika/ ~ /- (te; ni) sika/} の
異形態は、表7のように分布する。

表7 希求(願望)接尾語「(て・に) しか」の異形態

前 接 語 条 件	
「四段」型, 「ラ変」型	/-i (te;ni) sika/
「一段」型, 「二段」型 (-i-, -e-), 「サ変」型 (-i-)	/- (te;ni) sika/

- (14) 秋ならで妻よぶ鹿をきゝしか (*kik-isika*) な [秋でない時に妻を呼
んで鳴く鹿の声を聞きたいものだ]
(金葉・679)
- (15) 伊勢の海に 遊^(あそぶ)海人ともなりにしか (*nar-inisika*) [伊勢の海で遊
ぶ海人にでもなりたい]
(後撰・891)
- (16) いかでこのかぐや姫を得てしか (*e-tesika*) な, 見てしか⁷
(*mi-tesika*) な [なんとかしてこのかぐや姫を妻にしたいものだ, その
姿を見たいものだ]
(竹取・2)

7 Frellesvig 2010:241は “A new desiderative particle *gana* was used only after the combination of perfective and simple past auxiliaries, e.g. *mi-te-si gana* ‘see-PERF-SPST.ADN DESID; they wanted to see her’ (*Taketori*).” と述べているが、不適切な分析であり、解釈も ‘I want to see her’ のようにすべきである。

希求接尾語 {「ばや」: /-abaja/ ～ /-baja/ } の異形態は、表8のように分布する。

表8 希求（願望）接尾語「ばや」の異形態

前 接 語 条 件	
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ変」型 (-n-)	/-abaja/
「一段」型, 「二段」型 (-i-, -e-), 「カ変」型 (-o-), 「サ変」型 (-e-)	/-baja/

- (17) かかる所に、思ふやうならむ人を据ゑて住まばや (sum-*abaja*) [こういう所に、理想的な人を妻として迎えて住みたいものだ]

(源氏・桐壺)

- (18) 身を失ひてばや (usinaF-ite-*baja*) [いっそ死んでしまいたい]

(源氏・蜻蛉)

2.3 第三者の動き・状態への希求

希求接尾語 {「なむ」: /-anamu/ ～ /-namu/ ～ /-karanamu/ } の異形態は、表9のように分布する。

表9 希求（詭望）接尾語「なむ」の異形態

前 接 語 条 件	
「四段」型, 「ラ変」型, 「ナ変」型 (-n-), 特殊型 (-r-)	/-anamu/
「二段」型 (-i-, -e-), 「カ変」型 (-o-), 「サ変」型 (-e-)	/-namu/
「ク活」型, 「シク活」型	/-karanamu/

- (19) 関守はよひよひごとにうちも寝ななむ (ne-n-*anamu*) [関守は毎夜少しでも眠ってくれるとよいのだが]

(伊勢・5)

- (20) さもおはせなむ (oFase-*namu*) [そうあっていただきたい]

(源氏・滯標)

- (21) 松風のみぞ涼しからなむ (suzusi-*karanamu*) [松風だけが涼しく吹けばよい]

(うつほ・祭の使)

参考文献

- 大木一夫（2010）「古代日本語動詞の活用体系—古代日本語動詞形態論・試論」『東北大学文学研究科研究年報』59, pp.1-36.
- 小田勝（2010）『古典文法詳説』おうふう。
- 清瀬義三郎則府（1989）『日本語文法新論—派生文法序説』桜楓社。
- 金水敏他（2011）『文法史』岩波書店。
- 高山善行, 青木博史編（2011）『ガイドブック 日本語文法史』ひつじ書房（初版2刷）。
- 福田嘉一郎（2011）「中古日本語の蓋然性判断の非接統叙法」『CLAVEL』2, 対照研究セミナー（神戸市外国語大学益岡隆志研究室）。
- Frellesvig, Bjarke（2010）*A History of the Japanese Language*. New York: Cambridge University Press.

